

『資本論』体系の図式的解明(上)

梯 明 秀

は し が き

本稿は、今から殆んど五年前、すなわち昭和二十九年五月に国立横浜大学に開催された日本経済学史会において、わたしが研究報告をするさいに、会員に配布した図表二枚のうち、『資本論』の学的体系を表示した図式——いま一つの他の図表は、わたしの構想しつつある実践的直観の立場についての込みいった図表であるが、これが具体化するの¹⁾は将来に属することであって、現在その解明に衝動を感じているのは前者のみ——について、その理解を容易ならしめるために、いまここに若干の必要な叙述を加えただけのものである。わたしの報告内容のレジュメは、個条書きで極めて簡単であったため、——そして同年秋に刊行した拙著『資本論への私の歩み』にも収録しておいたのであるが、——学界および読者の無理解のままに放置されていると思われる。しかし右の図式は、戦前に始まるわたしの『資本論』研究が戦後に再出発されたとき——「現実的な学としての資本論」——以来、わたしの頭悩のうちに浮び描かれ、その後の研究過程において徐々に具体化されてきたものである。それだけでなく、現在においても、さらに、『資本論』のみならずマルクス主義経済学の全体系を概念的に把握せん

と念願している今後の研究過程においても、わたしの構想力の展開を決定している原理的な図式でもある。その
いみで、この図式の解明的叙述は、わたしの研究過程における必然的な所産とすべきであって、これによって、
わたしの研究態度と、その成果とが、より広く読者に理解されうるならば！ というのが、本稿に秘められたわ
たしの心からの希望である。わたしの『資本論』研究の態度については、前掲拙著に右のレジュメを取録するさ
いに付けた前文が要領よく伝えているので、左に引用することに止めて、ここでは多くを言わないことにする。

——「マルクスにおける思想の成長過程の跡をたどって、初期のヘーゲル批判以来の哲学的諸労作から、
『資本論』を最後とする経済学的諸労作への学問的歩みの移りゆきを、その外見的な現象のままに、哲学者
であることを止めて経済学者になつてしまつた、と見なすことを斥けて、彼は、最後まで哲学者であること
を止めなかつた経済学者であつたと、——したがつて亦、彼は、『資本論』においてこそ、哲学者として真
面目を發揮しているのであると、わたしは見たい。では、経済学的文献である『資本論』が如何なる点で哲
学であることを端的に示しているかとなると、現象的には、その経済学的叙述が徹底した嚴密な体系になつて
いる、ということに求めるほかはない。それにしても、この外的に現われている体系的叙述を真に体系的た
らしめた必然性の根拠としての内的なマルクス自身の思惟運動においてこそ、いいかえれば、この体系的叙
述の背景に秘む論理構造の体系性においてこそ、ヘーゲルを完全に止揚しえたマルクスの哲学者としての姿
を見ることができるとすべきである。したがつて、この哲学者として彼の姿を、彼の固有の経済学としての
『資本論』において鮮明に描きだして見ることは、われわれの『資本論』研究における一つの不可欠な領域
をなすものと考えねばならない。要するに、『資本論』をもつて、経済学的範疇で展開されたマルクス固有

の特殊な思惟運動の体系、したがって彼固有の哲学体系と見ることはいみずるのであって、この立場から、わたしは、『資本論』を論理学として読む⁽³⁾べき必要を、久しい以前から強調してきている。――

わたしが本稿において読者に期待する凡てのものも、このレジューメ前文に示されているわたしの『資本論』研究態度についての理解だけである。したがってまた、本稿において一つ一つ挙げてゆく予定の凡ての図式も、マルクスが『資本論』を著わす過程において、彼の頭脳の内に描かれていたはずだと推定されるものにはかならない。すなわち、彼の著作過程を貫いた必然的な思惟運動のみを説明するための論理学的な諸図式である。

(1) このようないみで、本稿の叙述の進行過程において、わたしの気づくかぎりの諸テーマについて、わたし自身の著述ないし論文の参照を、読者に要請することになる。このことによって、本稿において簡略にされた個所の、より正確な理解を期待したのであるが、逆に、拙著ないし既述の諸論文において、不十分な論述を、より詳細に説明するばあいも、あるはずである。

(2) このようないみでのマルクスの哲学者としての姿については、拙稿「資本論の学的体系性」(『立命館経済学』第一巻第五、六合併号)において詳述しておいた。

(3) 「資本論を論理学として読む」というわたしのこの主張は、戦前のわたしの『資本論』研究の最初からのものであって、レーニンがわれわれに残した課題を、わたし自身に引き受けたものであった。したがって、この課題解決の果さざるかぎり、わたしにとって、現在から将来に続けて変りえない主張である。この主張自体の内容については、拙著『資本論の弁証法的根拠』、『資本論の学問的構造』のそれぞれの「序文」ないし「跋文」、および『資本論への私の歩み』収録の「私の資本論研究」、「哲学から経済学へ」のB「資本論における主体性」、および「資本論の背景的論理」などを参照されんことを望む。

一 方法と体系との関連

マルクスのヘーゲル哲学からの思想的継承関係を論ずるにあたっては、当然のことながら、体系と方法との関連ということをも、まず最初に一般的な問題として誰れしも思い浮かべざるをえないであろう。そのばあい、マルクスはヘーゲル哲学から、その観念論的な保守的な体系を棄てて、その弁証法を継承し、これを唯物論化し進歩的なものに転化した、という系譜的事実がその前提になっている。たしかにエンゲルスも、このような主張を述べているし、その主張の正しいことには疑問の余地はない。しかしながら、この主張を正しいものと受けとるばあいに、ヘーゲル哲学の観念論的な体系のうち、それから機械的に分離しようとするような弁証法が秘んでいた、と考えたり、マルクスは弁証法のみを継承したのであって、学の体系性などは観念論とともに棄てて顧みなかった、というふうに考えたりするとすれば、右のエンゲルスの主張、したがって、この主張の根拠としての客観的な系譜的事実を、皮相的に理解したものであるというはかないであろう。なぜなら、およそ学問において、それが哲学であろうと科学であろうと、体系なるものは方法と有機的に結びついているものであって、両者の相互関連的な統一体からそれらの孰れか一方だけを機械的に切り離すということは、不可能なことであるからである。

いうまでもないが、ヘーゲル哲学においては、その学的体系性は彼の弁証法と有機的に統一されていたのであり、そのかぎり、彼の観念論的な弁証法なる思惟過程の成果として、必然的に彼の哲学体系——厳密には、思惟過程とその成果との全体としての体系——の保守的な性格を産みたさざるをえなかったのであった。それと同時に、マルクスがヘーゲルの弁証法を唯物論化したかぎりでは、この彼の弁証法的思惟の成果としての彼の経済学にも、

また、この方法と有機的に結びついているはずの学的体系性がなければならず、そのかぎりでもマルクス自身は、ヘーゲル哲学から、単に弁証法のみを批判的に継承したのではなく、それと同時に、その学的体系性をも批判的に継承することに、均しい重要性をみとめていた、とわれわれは考えねばならないのである。

ところで、この後のことは、一般にマルクス主義の理論的研究者に軽視され、そのかぎりでも、マルクスの学問的な熱情と真意とを、その一面において大きく逃がしたままに理解しているのが、日本だけのことでないところのマルクス主義学界の一つの偏向であると、わたしは見ている。マルクス主義が『資本論』という経済学的文献をもち、その叙述が優れて体系的であるということを、周知の事実とみとめながら、この『資本論』の叙述に端的に表現されている学的体系性が、ヘーゲル哲学の学的体系性と如何なる系譜的関連にあるのか、ということの分析的吟味は、経済学界においては殆んど無視されている、といつても過言でない現状でなからうか。マルクスがヘーゲルから弁証法を学ぶ過程において、これに有機的に結びついているその学的体系性をも、同時に唯物論の方向に質的に転化せしめるために如何に腐心したかを、彼の思索の跡に添うて追思惟ないし追体験するということは、もっぱら哲学者に委して顧りないという態度を、われわれは、とくに日本のマルクス主義経済学界において、方法論を問題にせざるをえないはずの原論の専門家のうちだけにでなく、方法論を専門とすることを志している研究者のうちにさえ、共通する傾向として見のがすことができな⁽¹⁾いのでないであらうか。わたしは、哲学者としての立場から、右の分業的課題を自らに引き受けて、上述の思想的系譜における学的体系性の面を重視しつつ、『資本論』において唯物論化されているはずのその学的体系が、ヘーゲルのそれとの比較において如何なる異質の論理構造をつめているか、ということの分析的吟味を、戦後の諸労作において継続的に行ってきたものである

が、このようなものとして、わたしは、いましがた述べた学界にたいする疑念をば、いつまでも私事にぞくする慨嘆として心に秘めておくことは、かえって学界のために貢献する所以でない、ここに思うにいたった次第である。

(1) マルクスの『資本論』を単純に経済学的文献としてのみ扱うことは、経済学界だけでなく学界一般において見られる風習である。この誤った風習は容易に打破られそうでない。しかし、このことの直接の責任は、すくなくとも現在の理論水準では、マルクス主義経済学界における方法論の研究者の安易な態度にかかっているのではないかと、と思わざるをえない。

方法論の研究者にかぎらず経済理論を専門とするマルクス主義学者が、『資本論』を勝手に経済学的文献にとどまるものと決めてしまいかぎりでは、その研究的理解の過程において、そこにおける思想的系譜関連を分析的に辿ろうとするばあい、当然ながら、古典経済学ないし近代以来の経済学の諸文献だけが、不可欠の重要性をもって立ち現れ、この方向と同様に不可欠な重要性をもつはずの他の方向への関心は、希薄になるか全く消えさってしまうほかはない。この他の方向というのは、いうまでもなく、古典経済学と並んでマルクス主義の三つ源泉と呼ばれているところの、フランスの社会主義とドイツの観念論哲学とへの二つの方向である。この誰しも熟知している事柄にかかわらず、思想的系譜を辿ろうとする実際の研究過程にあつては、いずれか一つの方向へ重点をおくかぎり、他の二つの方向が二義的になり、自ら択んだ方向そのものにおいて他の二つの方向が契機として統一されている重要な点を見逃しやすい、ということとは、誰にも共通することであつて、ここに責任を問うべきでないであろう。ただ、わたしは、右の三つの方向のうち、ヘーゲル哲学への系譜的関連を多少とも分析的に吟味してきたものとして、マルクス主義経済学の方法論を生涯の仕事と決めたかぎりの研究者にたいして、前述の誤った風習への責任を問うべきではないかと考えざるをえないものである。このように考えるのは、マルクスの方法論を理解するために、それについてのマルクス自身の叙述を研究ないし思索することでも不十分であつて、その理解の一そのの深化のために、ヘーゲル哲学の研究にまで遡源すべきだという主張を、わたし自身がつていているからであることは勿論である。

「事実において、マルクス自身の言葉ないし規定のみによつて彼の方法論を研究するばあいは、公式主義におちいる可能性を多分にもっているし、他方、マルクスの公式を、ヘーゲルとの系譜的関連において理解することを敢てしないかぎりでは、逆に、それについての主体的な独自の解釈を恣意的にほどこすことになるほかはないであろう。たとえ、後者が創造的に思索する生きた研究態度であるにしても、その解釈は、客観性を喪失してマルクス固有のものとは一致していない。自分の主観的な理解とマルクスの公式との間における、ただ直接的な一致に満足してしまっている公式主義、客観主義と、自分の主体的思惟をつうじての理解でなければ承知しないという態度はよいとしても、ただそれだけに甘んじて、この態度を媒介にして、両者の間の一致のために腐心することのない主観主義との、対立が——現在の日本のマルクス主義学界の一般的現象として見られると同じく——方法論の領域においても特に顕著な姿で現われているのであろうか。この現状からして、わたしは、わたしの実行してきている主張——ヘーゲル哲学の方法を止揚したマルクスの、その止揚の過程を追思惟することが、マルクス自身の主体性を理解するための唯一の客観的な態度であるという主張——を、ここに、改めて強調せざるをえないのである。もし、経済学方法論の研究家たちによつて、このわたしの主張が受け容れられ、一つの協力態勢が成り立ちえたとすれば、『資本論』が単に経済学的文献であるだけでなく、同時に同じ比重をもつて哲学的文献でもなければならぬという、この著作本来の学的体系性への理解を、学界に普及せしめるための機運が作られることもまた期待することができよう。このような理解の一般化こそは、マルクスの学問的業績を、その真意において、全具体性において、継承する所以のものでなければならず、また、そのための一つの大きな協力態勢は作りだすことは、われわれマルクス主義の立場にある理論家の与えられている課題であると、わたしは信じている。そして、ただ、それであるからこそ、わたしは、方法論研究家の責任を敢て問うたまでである。このような課題を前にして、経済学者の側から、ヘーゲル哲学への軽視ないしは敬遠の風潮を敢て示されているということは、如何なる学者的態度と受けとつてよいであらうか。

わが国においても、哲学者の側から『資本論』の研究を志し、その実績を挙げている若干の人々が、戦前から既にあった

し、現在にもあることは、周知の事柄である。マルクスの唯物論が、いわれるとおりヘーゲル弁証法の経済領域への実現であるかぎりでは、その方法なり体系なりが如何に質的に転化され、如何なる具体的形態をとっているかを、探究しようと志す以上は、誰しも『資本論』を論理学として読むという方向に一步を進めざるをえない必然性にあるのであるが、この方向への前進を企てたものは、右の若干の人たちを教えるだけであること自体、哲学者の側からの一般的な無関心ないし不協力もまた責められてもやむをえないであろう。しかしながら、哲学者の側からのこの歩み寄りには、わが国以外の諸国においても、単にその必然性において期待されているというだけでなく、現実的な動向になっていることを、われわれは無視するわけにはゆかない。わたしは、三年半前からの病気で読書から隔絶して、ようやく昨秋以来すこしずつ読み始める状態になったばかりであるが、藤野渉氏の「ヘーゲル哲学にたいするマルクス主義の関係——東ドイツにおける討論について」を一読して、この感を特に深くした。これは一九五四年に『ドイツ哲学雑誌』Deutsche Zeitschrift für Philosophieに掲載されたグロップの論文を中心として、同誌編輯部の呼びかけに応じて生じた討論である。グロップは、ホルニエの『カーン・マルクスと近代的思考の発展』August Cornu, Karl Marx und die Entwicklung des modernen Denkens. および特にルカッチの『青年時代のヘーゲル』Georg Lukacz, Der junge Hegel: Über die Beziehungen von Dialektik und Ökonomieを批判したものであるが、これを中心とした討論への参加者としては、August Cornu, Frits Behrens, Wolfgang Schubardt, Erhard Albrecht, Wolfgang Mönke, Josef Schleifstein, Joahim Höpner, Iring Fettscher, Jurgen Kuzynskiなどの名が挙がっている。わたしの通読による所感は、この討論において、ヘーゲルとマルクスとの継承関係が同時にスミスその他の経済学との関連において扱われているということ、さらに、それがマルクス自身の思想的形成期だけにおいてでなく『資本論』の哲学的理解にまで発展さすべき動向を当然ながらもたざるをえなくなっているということ、これらのことについての驚きと喜びと、わたし自身に省みてかかる具体性を欠けるいみの嘆きとである。とにかく、このような動向を現実に見るかぎりでは、日本の今後のマルクス主義経済学、したがって『資本論』の方法論的研究は、従

米のとおり経済学者が哲学者の諸労作を無視し続けるということでは、その水準を質的に飛躍せしめて一段と高い段階に引き揚げることは、不可能であろうとわたしは信ずるのである。

ところで先きに述べたところの、体系と方法との有機的な関連——さらに厳密に言えば、およそ学問においてこれらの両者は二つの契機として相互に関連して一つの統一的全体を構成している——ということは、とりあえず、ただ一般的な事柄としての主張であつて、これが特殊化されたばあいには、たとえば、そこにおける方法が弁証法という特殊な様式をとってくるばあいには、方法と体系とは必ずしも両立しないという考え方も或は可能でありうるであろう。ヘーゲルとマルクスとのばあいは、まさにこの特殊化された形態において論ぜられねばならない当面的ものであるはずであるが、わたしは、この特殊化された形態においても、体系と方法との有機的関連という一般的な論理構造は壊れるものでないという立場にあり、そして、ここでこの問題を抽象的に論ずるところは、本稿の目的から逸脱するので、避けておくことにする。⁽²⁾しかし具体的に、ヘーゲルとマルクスとの思想的継承関係に当面している事柄についてだけ附言しておくならば、この継承関係という客観的な事実にたいする解釈として次のような主張があるということについてである。すなわち、ヘーゲル哲学において、その弁証法は、その体系に制約されていることが事実であるにしても、この弁証法の弁証法たる本来の規定からして、その真実の生命ある自己展開は、体系の枠を打ち壊して外に溢れ出た、という主張である。そして、キェルケゴールおよびフョイエルバッハないしマルクスの弁証法的思惟を、その例証とすることができるであろう。このうちマルクスの思惟様式が当面の問題であるから、これに多少の言葉を費しておくことにするならば、右の主張は継承関係の事実にたいする客観主義的な解釈でないか、ということである。

ヘーゲルの観念論の体系に構造的に関連し制約されている弁証法において、その弁証法たるための本来の規定を発見せんとし、これを唯物論的に具体化せんとしたものは、マルクスの主体的努力そのものであって、そして、この唯物論的に規定された弁証法がヘーゲルの哲学体系の観念性、保守性の枠を打ち破った、というようにマルクスの主体性の立場にたつて、その継承関係の客観的事実は解釈されねばならないというのが、わたくしの主張である。なるほど、ヘーゲルの全哲学体系を一貫する観念論的弁証法には、彼の体系の保守性を否定する進歩的な面、ときとしては急進民主主義的な面が、さらに体系的観念論的な枠を踏みこえて唯物論への一歩手前まできている点があるが、その部分的叙述として少なからず発見しうることに、われわれは眼を外らしてはならない事実ではあろう。そして、マルクスもまた、これらの部分的叙述に敏感に注目し、これを鋭く分析したということも、また事実であった。しかしながら、とにかく、ヘーゲル哲学において、その全体系を産み出した弁証法は、感性的契機の捨象されたところの純粹思惟であり、この純粹思惟の自己展開は、同時に対象的實在の自己運動の論理であるといつても、この實在性とは、感性的實在 *Realität* を疎外の状態とみるところの絶対精神の本質性 *Wesenheit* にほかならないものである。そして、この絶対精神が本質であるところの實在が、その内容的な事柄それ自身の歩みによつて、われわれの学問的意識を内から決めてゆくとするのが、ヘーゲルにおける思惟の方法であり、また叙述の方法でもあった。ここに、實在的内容の自己運動と、思惟の自己展開と、叙述の進展との三つの事柄が、方法として統一的に把まれている、といふヘーゲル哲学における傑れた特色を、われわれは洞察しておかねばならない。というのは、マルクスがヘーゲルから弁証法を学んだということは、さきに指摘した弁証法の部分的叙述における進歩的ないし唯物論的な個々の面に眩惑されたことでは無論なくて、ここに洞察すべき

ものとしたヘーゲルの方法論のこの特色を大きく継承したのであって、この実在と思惟と叙述との三つの統一という弁証法的方法論の論理構造を唯物論的に改造することが、マルクスの仕事であり、そのさいに、右に注意しておいた傑れた部分的叙述が顕著な役割を演じたのであり、さらに溯って、かかる傑れた部分的叙述そのものも、ヘーゲルの方法論の全体的性格が今しがた述べた傑れた特色のものであったことの結果的表現であった、とわれわれは理解しなければならぬのである。

(2) この点については、前掲拙稿「資本論の学的体系性」(『立命館経済学』第一巻第五・六合併号)一二六―七頁に一言触れておいた。

(3) このことについても、同右拙稿の一〇三頁を参照。

ヘーゲル哲学において、方法ということを上のように理解すべきであるとする、つぎに、その体系性を如何に理解せねばならぬであろうか。このことの詳細な論述も、本稿では省略することにして、ここでは、その結論的な要点だけにとどめておくほかはないが、ヘーゲルにあつては、体系とは、右のいみにおける動的な方法論的全過程のことである。いいかえれば、実在的内容がそれ自らの本質にもとづく必然性にしたがつて一步一步と合目的々に自己展開してゆく運動過程の全体のことである。したがつて、かかる過程の成果のみをとつて体系とするのではなく、この成果とそれを産み出す過程との総体における全体性を、学の体系性とよんでいるのである。この点は重要であるから左にヘーゲル自身の言葉を引用しておくが、そのままに、ここで、方法と体系とはヘーゲルにおいてかくのごとき連関において有機的に統一されていることを、すなわち、方法自体が体系的であるということ、念頭におくべきであろう。

——「或る哲学的著作の核心は、その諸々の目的および結果におけるよりも、より以上に、如何なる点において、正しく言明さるべきであるか。この問題にふくまれる事柄は、その目的のうちに尽されているのではなくて、その実現のうちに尽されており、結果もまた現実的なる全体ではなくして、その成立過程を併せて、現実的なる全体であるからである。傾向が、いまだ現実性を欠いた単なる成長であると同じように、目的は、それだけでは生命なき一般者であり、そして、むきだしの結果は、傾向を背後に残した屍である」⁽⁴⁾。——
そして、ここに述べられていた全体、すなわち、過程と成果との全体を、ヘーゲルが体系と考えていたことは、さらに次の引用句から説明を要しないことであろう。

——「真理とは、全体である。だが、全体とは、その自己展開によって自己を完結しつつある実在 *Wesen* にほかならない」⁽⁵⁾。しかも、この「真理が現存するための真の形態は、真理の学的体系を描いて他にありえない」⁽⁶⁾。——

これらの言葉をつうじて明かなことは、過程としての方法と成果としての体系との有機的統一ということが、動的であるということである。すなわち、ヘーゲルにおいては、方法も体系的でなければならず、体系も逆に方法的であり過程的なものでなければならぬのである。体系を方法の成果とのみ限定することは、体系を静的なものとして把握することであって、ヘーゲルの立場では許されない。かりに、方法の自己運動の切断面を体系とみるにしても、かかる切断面のみでは、ヘーゲルのいうとおり「運動を背後に残した屍である」にすぎない。その他いかなるいみにおいても静止的なものとして、体系を考えることは、実在の自己運動も、思惟の自己展開も、叙述の進展も、いな、これらの必然的な諸過程こそが、すべて体系的であると主張するヘーゲルにたいして、お

よそ縁のないことだと、われわれは確実に判断しておかねばならぬ。

(4) 前掲拙稿、一〇四頁。

(5) 同右、一〇四頁。

(6) 同右、一一四頁。

ヘーゲル哲学における体系ということについての以上の理解を前提しておいて、そのマルクスへの継承関係を分析しようとするばあい、誰しも、『資本論』における叙述の体系性が、われわれ感性的人間の思惟の自己運動の所産であつて、ヘーゲルにおけるごとき絶対精神の純粹思惟のそれではないにしても、それが發展的な過程そのものであり、けつして静止的な図式にとどまるものでないことに、想い至るであろう。ここに想い至れば、さらに、まず第一に、この体系的叙述に前提されているマルクス自身の思惟運動の体系的運動が、それが純粹思惟のそれでないかぎりで、ヘーゲルと如何に異っているか、そしてつぎに第二に、この異質的な思惟様式によつて、絶対精神ならぬ絶対物質を本質的規定とする感性的実在としての、現実の歴史的内容それ自体の自己運動が、如何にしてマルクスにおいて把握されること——「物質の現象学」——になつてゐるか、ということが次々と分析されねばならない課題として、われわれに当面していることに当然ながら気づかれうるはずである。

(7) この概念が如何に規定されるべきであり、さらに、この規定が如何に具体的に展開されるべきであるか、ということは拙著『物質の哲学的概念』以来、『社会の起源』および『資本論の弁証法的根拠』にいたる戦前の研究過程において、一貫して追究されたところのものであるが、マルクスの思惟運動の成立する地盤としての感覚即思惟の弁証法的統一のことについては、右の第三の著述の第一篇「生産世界の判断過程」と、補説その一「歴史的自然」および補説その三「歴史的統覚」において、詳述してある。

ところで、これらの当面の課題を、体系的な叙述によってでなしに、静的な図式によって説明してゆこうとするのが、わたしの本稿を意図するところであるが、それは、わたしの戦後におけるこの課題についての体系的研究過程を、読者に端的に理解して貰うための便宜的処置であるにすぎない。そこで、まず初めに、『資本論』の体系的叙述の前提になっているはずの、マルクス自身の学問的思惟の必然的な自己展開における体系性についてであるが、これが、ヘーゲル哲学の方法としての弁証法的思惟の自己運動の体系性と、如何に関連しているかの、第一の問題の解明から着手するのが順序であろう。そして、わたしは、これを以下の二、三節に互って論述し、図式的に解明してゆくであろう。

二 『批判序説』の方法論

さて、『資本論』の方法論的把握にあたって、『経済学批判』「序説」の第三節「経済学の方法」を理解すべきであるとするのは、右の体系性というような問題意識の有無にかかわらず、誰れしも、気づいて実行しているところである。そしてまた、このことは、マルクス自身の方法論的思惟の形成ないし発展の順序でもあることから、彼自身がマルクス主義研究者に要請した手続きにもなっているともいえよう。しかし、この研究者への手続き上の要請をば、ただ単に実際的に便宜である順序の指摘として受けとるだけでなく、これを方法的に受けとめ、この方法論的要請の真実の意味が何であるかを、深く掘りさげることによって、われわれは始めて、マルクス主義経済学における方法的思惟の体系性をば、説明することもできるとせねばならぬ。

事実として、マルクス自身によっても、右の「序説」第三節において、経済学の方法が体系として述べられて

いるのである、いわゆる下向上向の方法が、まさに、その方法の体系性である。このことを理解するために、誰れにも熟知されている叙述の個所を、この目的に役だつ諸句のみを、しかも多少とも組み替えて、左に引用しよう。

——「われわれが、或る与えられた国を、経済学的に考察 *Betrachten* するばあいには、われわれは、その国の人口、その人口の諸階級への、都市、農村、海洋への、種々の生産部門への分配から始める。……（だが、この始め方は、より立ちいつて考察すると誤りであることが解る。）……人口のような、実在的なもの、具体的なもの、すなわち現実的前提から始めるとすれば、それは、全体についての一つの混沌たる表象であるにとどまるであろう。そこで、われわれは、より精密な規定によって、分析的 *analytisch* に、次第により単純な諸概念に近づくであろう。すなわち、表象された具体的なものから、ますます稀薄な抽象的なものに進んでゆき、ついには、最も単純な諸規定に到達するであろう。そこから今や再び、後方への旅が始められ、われわれは再び人口に到達するであろう。だが今度は、一つの全体としての混沌たる表象 *Vonstellung* としての人口ではなくて、多くの諸規定と諸関係とをもつところの豊富な一総体性（|| すなわち具体的な概念 *Begriff*）としての人口に到達するであろう。……（この後の方法は、明らかに、学問的に正しい方法である。）……だから思惟においては、具体的なものは、総括 *Zusammenfassung*（|| 綜合 *synthetisch*）の過程として、結果として現れ、出発点として現れない。もっとも、それは、現実的な出発点で、したがってまた、直観および表象の出発点であるが、第一の途 *Weg* においては、完全な表象が蒸発せしめられて抽象的規定になり、第二の途においては、抽象的な諸規定が、思惟の途をとあつて、具体的なもの（|| 对象的実在）の再

生産（『具体的な概念』）に導かれてゆく。この、抽象的なものから具体的なものへ上向する方法は、具体的なもの（『實在』）を占有するための、具体的なもの（『實在』）を一つの精神上の具体的なもの（『概念』）として再生産するための、思惟の様式にすぎない。……このばあい、實在の主体は、依然として、頭悩（『上向的思惟の自己運動』）の外で、その自立性において存続する。」——

以上の引用文だけで、経済学を研究するばあいの、われわれの思惟の自己展開——これは、頭脳外の感性的實在がその歴史的現実としての自己運動を、頭悩内に自己展開せしめたものであり、そして、この外から内への自己展開については、前節に挙げた第二の問題として本稿の最後の節にその説明が予定されているものであが——は十二分に規定されている。しかも、ここで既に、この思惟の自己展開の体系性についても、また明白な解説が、方法的要請を暗示しつつ、なされているのである。すなわち、現実的實在の直観ないし表象から出発する分析的な前方への旅としての「第一の途」と、その到達点である最も抽象的な概念規定からの総合的な後方への旅としての「第二の途」との、両者の統一によって「直観と表象との概念への加工 Verarbeitung」ということが、すなわち、歴史的事在の概念的把握ということが、可能であるとされているのである。これは、方法の体系性についての明白な主張でなければならない。とするならば、われわれがこの点に問題を意識するばあい、マルクス原文のなかに述べられてあるところのヘーゲルの思惟方法との対比は、この方法の体系性を、さらにヘーゲルのそれとの対比において深化すべきこと的方法論的要請を、われわれに暗示したものととして、受けとめるものでないであろうか。この点は後述に残すとして、右の引用句に表されたかぎりのマルクス主義的方法の体系性そのことにたいしてのみ、さしあたり、われわれの分析的な吟味をほどこしてゆくことにしたい。

そうすると、右の引用文において、マルクスは「抽象的なものから具体的なものに向かう方法は、具体的な実在を精神的に占有し再生産するための、思惟にとつての様式 *die Art für der Denken* である」と述べているが、この第二の綜合の途が、かかる思惟様式 *Denkweise* であるならば、第一の分析の途も——マルクスは前者のみが「思惟の途」であるかのごとく述べているにしても、にもかかわらず抽象する思惟の方法として——また一つの他の思惟様式でなければならぬ。すなわち、われわれの学問的思惟には二つの様式があることを、マルクスは指摘しているものと考へなければならぬ。そして、ここに第二の途が上向と呼ばれているにたいして、第一の途をわれわれは下向と呼びならわしているのであるが、引用文に明かなように、われわれの思惟の上向過程は、その下向過程を前提してのみ可能であることが、マルクスにおいて主張されている。

このことの注意は、彼の経済学方法の体系性のヘーゲルにたいする質的差異を把握しうるか否かの岐路を決定するものとして、重要である。すなわちマルクスは、かく主張することにおいて、右の上向する思惟の自己運動が同時に「具体的な実在自体の成立過程」をもいみするように展開したヘーゲルの方法論から、自分の立場を截然と区別する。だがしかし、それと同時にマルクスは、上向の到達点としての「具体的全体性が概念作用の産物である」こと、したがってまた、このヘーゲルの「自己自身を生みだすところの概念」作用をば、これが「直観と表象との外において、或は、それらを超越して」いないかぎりにおいて、「正しい」ものとしてヘーゲルから継承しているのである。このような思惟の上向的自己運動こそは、ヘーゲルの全哲学体系を形成せしめた弁証法であった。ただし、マルクスはヘーゲルのかかる上向的自己運動の様式だけを継承したのであって、この様式において自己展開する主体としての絶対精神は、当然ながら排除した。そして、この主体を物質に転換せしめ、し

かも、概念的範疇による一步々々の自己展開を、感覚と思惟との統一の過程として再構成したのであった。すなわち『資本論』の体系的叙述に見るように、一つの範疇は、商品にせよ貨幣にせよ資本にせよ、すべては、概念にして同時に実在であり、思惟と感覚との弁証法的統一¹⁾である。これが、「直観と表象との概念への加工」ということの可能なるがための、マルクス固有の哲学的地盤である。そして、彼が彼自身のこの哲学的地盤において批判的に継承したところの、ヘーゲルの上向的な思惟の自己展開なる運動としての方法が、外的な感性的実在との統一において進行する点で、——この点は、後節において明確にさるべき重要な事柄であるが——質的差異を見るのであって、また彼が上向の途を「総括の過程」と呼んだことも、深くこの意味において洞察しておかねばならないのである。そこで、ヘーゲルの思惟の自己運動がたとえ思弁的な演繹の上においてであるにしても総合的であったと同じように、かかるいみで総合的であるマルクスの上向的な思惟の運動も、逆に演繹的なものであることも、また承認しておかねばならないであろう。

(1) 前節の註(7)において予め指摘しておいたところであるが、マルクスの上向的な思惟のこの特殊な哲学的地盤については、ならばに、その上向的な思惟そのものが感覚と思惟との弁証法的統一という構造をもっているということについては、拙著『資本論の弁証法的根拠』の第一篇、および、その「補説その二」「その三」を参照されたい。

(2) なお、この点は、わたしがヘーゲルの『精神の現象学』にたいして「物質の現象学」と呼んでいるところの、マルクス主義全学的体系の一部門を、構成するための領域であることの指摘によつて、その重要性を、ここで予め読者の注意を喚起しておきたい。わたしの「物質の現象学」なる構想については、前掲の「資本論の学的体系性」に始まって、「労働市場における法的な人格」（『立命館法学』第一一、一二、一三の各号連載）の第四節にいたつて、かなり詳細な論述ができているところで、このように規定された上向的な思惟様式にたいして、下向として正反対の方向をいみする言表を当

てがっているところの、いま一つの他の思惟様式としての第一の途は、如何に規定されるべきであろうか。これが正反対のものとしての内容をもつべきであるとすれば、思惟の上向過程が綜合的にして演繹的なものであるかぎり、その下向過程は分析的にして帰納的なものでなければならぬ。そして後者が分析的であることについては、右の引用文においてマルクス自身によつて規定されている。しかも、それが近代の経済学の実証的方法の批判として述べられているかぎりでは、この分析が帰納的であることも、また自明のこととせねばならぬであろう。したがつて、帰納的分析と規定さるべき下向の過程は、マルクスがそのままに継承したところの、科学としての経済学の成立以来の科学の方法であり、これにたいし演繹的綜合と規定すべき上向の過程は、上述のとおりヘーゲルから批判的に摂取したところの、マルクスの哲学の方法であつた、とわれわれが考えることに問題はない。ただ、ここで留意すべきことは、マルクスにおいて哲学の方法とは、上向が下向を前提したかぎりのものとして、かならず科学を前提し、これを媒介にせねばならぬものであるということである。かくて「直観と表象との概念への加工」ということは、科学を媒介にした哲学といういみに理解されねばならないことになる。

マルクスは、下向の「第一の途は、経済学がその發生にあつて歴史的に辿つたところのものである。たとえば十七世紀の経済学者たちは、つねに生きた全体すなわち人口、国家、多数の国家、等々から始めた」と述べながら、「この始め方は、より立ちいつて考察すると、誤りであることが解る」としている。これによるとマルクスは、本来、学問は、「現実的な出发点」としての實在的な具体性から始むべきでない、と考へていたようである。しかし、このことは、この出发点から抽象的範疇に到達する分析的な過程をば「学問的に正しくない」思惟としたのであろうか。勿論、そうではなくて、たとえば「十七世紀の経済学者たちが、若干の規定的な抽象的一

般的諸關係、たとえば分業、貨幣、価値、等々を見つけたことに終つてゐる」ことに、批判を下してゐるのである。すなわち、生きた全体から出発して抽象されえた一般的諸關係は、この出発点としての生きた全体を、ただ表象ないし直観として生きたままに放置しておいても、自らの概念規定によつて生かしたことになつていない。いいかえれば、ただ「見つけたことに終つた」かぎりのかかる抽象的な一般的諸關係は、概念規定としては死んでゐるのである。というのが、十七世紀の経済学者たちの方法論にたいするマルクスの批判であつた。

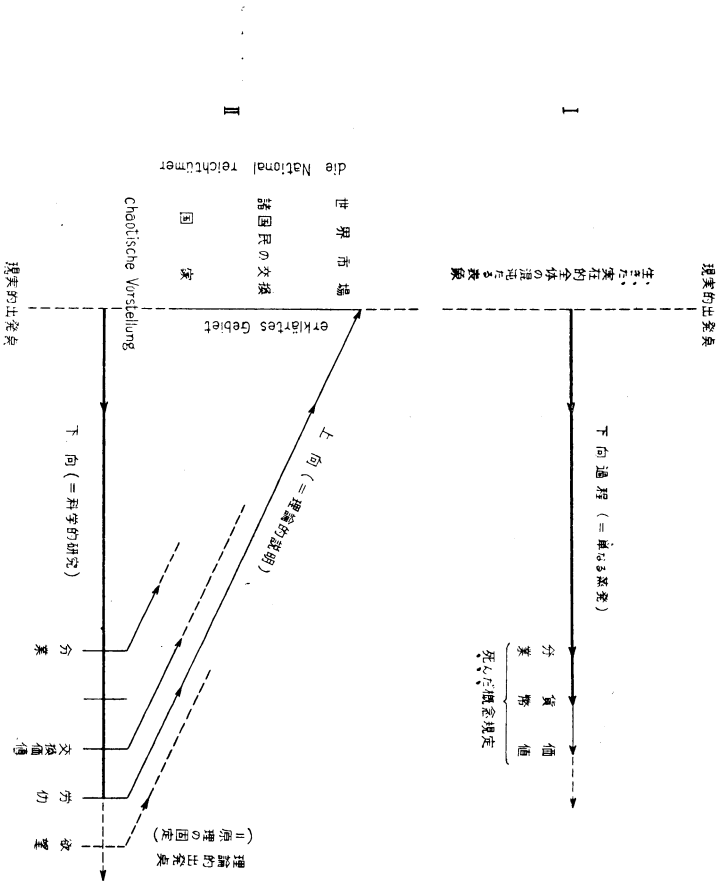
なるほど近代の経済学者たちの研究対象たる現実に生きた具体的なるもの、すなわち近代資本主義社会は、これらの一般的諸關係ないし抽象的諸範疇が分析的に見いだされなにかぎりでは、それらの諸経済学の現実的出发点は、資本主義社会「全体の一つの混沌たる表象」にすぎないであろう。しかし、これらの諸範疇が抽象され、それぞれの原理として固定されてゐるかぎりにおいては、これらによつて現実の具体的総体としての資本主義社会は、それぞれのいみにおいて原理から説明される。すなわち概念規定によつて、混沌たる諸表象は再構成され、頭脳の外の生ける全体が頭脳の内においても生きたものとして再生産される。かくして、この研究対象全体についての「混沌たる表象」は概念に転化され、ここに実証科学としての理論体系は成立する。すなわちマルクスも、「これらの個々の契機が多かれ少なかれ固定され、抽象されるにいたるや否や、労働、分業、欲望、交換価値のような単純なものから、国家、諸国民の交換、世界市場にまで上向してゆくところの、経済学の諸体系が始まつた」と述べたのである。この文章には下向してゆく「第一の途」は、かならず「第二の途」を目的とし、これを前提しなければならぬことの主張が、よこたわつてゐるものと、われわれは洞察せねばならない。もし、「第一の途」と「第二の途」とを、この前提關係から切り離して別々に並べて見る——マルクスも本文の叙述では確

かにそのようにしている——かぎりでは、「第一の途」は、出発点における生きた「完全な表象が蒸発せしめられ、対象的な規定となる」だけのことで、要するに死んだ概念規定の固定された表象に転化されただけにすぎない。これが十七世紀の経済学者たちに見られる経済学発生当初の方法論であった。ところで、この「第一の途」を手段として前提したはずの「抽象的な諸規定が思惟の途をおって具体的なものの再生産にみちびかれてゆく第二の途」を歩んで成立したところの、近代の理論経済学の諸体系——この「第二の途」がいまだ「第一の途」を目的として前提していないかぎりのものとして、両者が相互に対等に対立したうえで前提し媒介しあつた一つの全体とは見ざるべきでないところの諸体系——の更に発展した古典経済学からマルクスは、対象としての経済自体の本質的内容について多くのものを学びとるとともに、理論経済学の実証科学たる所以のその方法論をも、自らの立場に止揚するといふいみで批判的に継承していたはずである。

(3) この下向としての抽象する思惟は、表象から自らを引き離し自らを固定する作用として、悟性の能力の機能に属するものである。したがって、上向といふことも、この下向的思惟の悟性的立場の自己否定として、ヘーゲルのいうところの消極的な理性に転化したかぎりのものならば、まさに弁証法的な思惟なのであるが、近代の経済学を体系化せしめたところの上向的思惟は、ただ作業仮説としての説明原理から演繹的に検証してみるだけのものにとどまるものとして、依然として悟性の機能にとどまるものである。この意味で図式Aを見られたし。

すべて実証科学は、自然科学にせよ社会科学にせよ、この帰納的分析という思惟の下向過程なくして、成立することはありえない。ただ、そこにある問題は、各科学のそれぞれの対象としての現実的實在の総体をば残りなく説明しうるような原理的範疇にまで下向しえているか否か、ということである。この抽象化する分析が不徹

Schema A



底なるかぎり、対象的實在の総体は、完全に概念化することをえず、いまだ「混沌たる表象」のままの諸部分を残すことになる。したがって、これらの残された「混沌たる表象」諸部分の消滅するまでは、分析的抽象の思惟運動は何処までも続けられねばならない。対象的實在の総体を限なく完全に説明しようとの確信において、研究者は、その下向を止めるのである。マルクスも引用句のうちで「この後の上向の方法は、明らかに、学問的に正しい方法である」といっているが、ここで上向ということは、單純に方向を轉換するというだけのことでなくて、この「後方への旅」の出発点においては、下向的分析において獲得された抽象的範疇が、具体的現實の総体を果して完全に説明しようというための確乎たる見とおしが、絶対的な契機として欠けてはならない。この上向過程の到達すべき目標である現實的総体の具体的諸規定が未展開のまま、その出発点において、即自的に潜在せしめられていなければならない。要するに方法論的な意味で、端緒でなければならぬのである。したがって、思惟の上向過程を、単に、下向過程の成果としての特定の抽象的範疇が果して現實的総体を概念的に説明しようか否かの論証の過程である、としてのみ理解することは許されない。というのは、そこには、何故、そこから出発したかの必然性がないからである。いいかえれば、どの抽象的範疇を説明原理として撰択し決定するかは、研究者の主観的な判断、要するに偶然的な恣意にもとづいて見なければならぬからである。ところで、このような偶然的でしかない端緒をもつ上向の思惟としての論証過程こそが、まさに、実証科学における上向ということの論理構造である。そして、論証なるものがすべて叙述に表現されるかぎり、マルクスは、このような論理的に不備な上向であっても、これをまっして始めて近代の経済学の理論的な諸体系もまた成立するにいたったと述べたものとして、われわれは理解せねばならない。ただ、ここで注意しておくべきことは、このことの叙述さ

れてある文章に続いてマルクスが、上向的な「この方法は、明かに学問的 wissenschaftlich に正しい方法である」と言っていることである。では、このことは如何に理解すべきであるか。

(4) 実証科学における理論的叙述の方法論としての上向の途にあつては、すべて端緒についての問題意識が欠けている、ということの指摘については、拙稿「歴史的现实と経済学方法論」（立命館大学人文科学研究所『紀要』第三号所載）の一〇頁および三五頁を見よ。なお本節の叙述の殆ど凡ては、右の拙稿の第二節「哲学的演繹と科学的分析」において論述されたものの要約、ないしは、その敷衍である。したがつて、より正確な理解のためには、それとの比較が望ましい。

物理学にしても生物学にしても、すべて実証科学は、ないし、その諸部門の諸知識は、かかる上向的方法をまつて初めて体系的なものとなるかぎりでは、この上向的方法こそが「科学的、wissenschaftlich に正しい方法」であるとも、あるいは理解もされよう。しかしながら科学的方法の実体的本質は、トライ・エンド・エラーの下向的方法でなければならぬ。分析的な研究過程なしの上向的思惟の運動は、主観的に扱はれた任意の原理から實在世界を演繹的に説明せんとする形而上学的な思惟の方法でしかない。上向的思惟の運動の、叙述に表現されるものとしての、演繹的な論証の過程は、分析的な研究の過程を前提せずしては、形而下的な実証科学の理論体系たりえない。とすれば、「科学的に正しい方法」といっても、それは、上向的思惟だけで、そうだとしたことではなく、まさに科学そのものであるべき下向的思惟を前提したかぎりでは、実証科学を理論科学として完成せしめるといういみで、そうだとしただけのことにすぎない。いいかえれば、実証科学において上向とは、下向的研究の成果についての叙述のことでなければならぬ。下向の到達点としての抽象的範疇が、その現実的出发点であった實在世界の全体を説明しうるための原理であるか否かの論証の叙述でなければならぬ。と同時に、研究

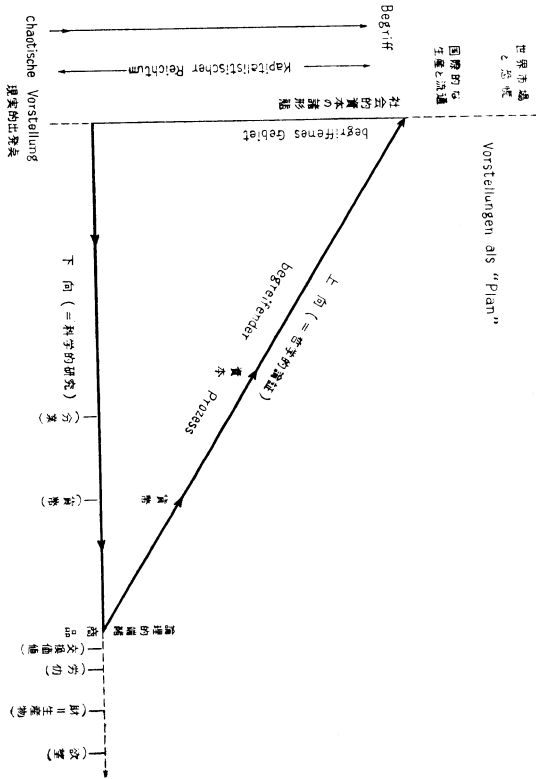
者のかかる主体的確信の自己検証の過程でなければならぬ。論証されていない原理は、すべて実証科学においては真理とされえない。単なる仮設にすぎない。したがって実証科学においては、上向的方法なるものは、下向的方法だけの科学が、さらに真に具体的な科学性——理論的体系性——を獲得するための不可欠の条件である、というだけのことであって、その上向的方法のみが実証科学において科学的たるための本質的根拠である、ということではない。このことの裏の主張を表にだして言うならば、マルクスは「哲学的に正しい上向的方法」をヘーゲルから学んでいるのであって、この本来的に哲学的な上向の方法が、実証科学の本来の下向的方法に媒介されたときに、この実証科学は真に体系的になる、ということになる。マルクスは自分自身のこの立場から、自分の立場にまで引き揚げるという主体的な態度で、自分より以前のすべての実証的な理論経済学の諸体系を、批判したのである。この弁証法的な止揚であるところの系譜的関連を、われわれもまた主体的に把握するべきでは、近代の経済学の諸体系における上向の方法は、哲学的上向の意味を孕み、それを指向するものとして、「wissenschaftlich」に正しい方法である」評価したものと、われわれは解釈しうるであろう。事実、原文の叙述は、この言葉から、ヘーゲルの上向的方法の批判に移っているのであるから、この解釈は行文中から見ても決して不自然ではないであろう。したがって、この wissenschaftlich なる単語は「科学的に」と訳すべきでなく、科学と哲学との統一という意味で「学問的に」と訳がべきだとするのが、わたしの⁽⁵⁾年来の主張である。

(5) この主張は、前掲拙稿第二節において勿論のことながら述べられたところのものであるが、ここで再び、原文のより詳細な分析的吟味によって、繰りかえし強調する次第である。

以上を要約すれば、近代の理論経済学が体系的になりえたのは、「学問的に正しい方法」を無自覚的ながら取

り始めたからであつて、この方法の自覚的な適用において初めてマルクス経済学の方法論的体系が成立した、ということになる。そして、この「学問的に正しい方法」とは、科学的思惟の固有な下向的分析は哲学的な上向的综合のための端緒を発見することを目的としたものでなければならぬ、ということになる。すなわち、マルクス経済学においては、その下向的思惟は、その上向的思惟を目的として前提し、したがって、初めから、これを媒介したものとして存立しているものであることは、近代の理論経済学の諸体系と共通する論理構造をもつものであるにしても、この上向的思惟が哲学的な端緒の問題の自覚的意識において成立している点で彼以前の経済学諸体系と異なる、ということになる。この点は、さきにわれわれの見てきておいたごとく、マルクス経済学における上向的思惟は、ヘーゲル哲学におけるその批判的継承であつたことから自明の事柄であろう。ただ、それと異っている点は、必ず下向的科学的思惟を媒介にしたものでなければならぬ、ということであつた。であるとするならば、マルクスにおいては、上向的思惟と科学的な下向的思惟とは、前者が後者を前提して存立しているというだけのことではなく、同時にまた逆に下向としての帰納的分析は、上向としての綜合的演繹を前提するものとして、両者は相互に媒介しあつて、一つの統一体になっている、いかえれば両者は、ただ外的に差別されたままの二つの思惟様式ではなくて、同一の思惟が二つに区別された様式である、ということが完全に実現されているものとしなければならぬ。そして事実、マルクスもまた、そのように両者が有機的に統一されているものでなければならぬと考え、とくに端緒の問題をヘーゲルとともに重要視して、「学問的に正しい方法」を打ちたてたのであつた。そして、これこそが「直観と表象との概念への加工」というマルクスの方法論の体系性をなすものであるが、この体系的構造の全面的理解を以下の各節を追つて一步一步深めてゆくために、今までに理

Schema B



『資本論』体系の図式的解明(上)(梯)

解されたかぎりの内容を図式化すれば、シエマBの如くなる。

この図式Bについて多少ながら附言しておくならば、この図式は、今までの論述内容、したがって『経済学批判』序説におけるかぎりの論述内容によつたものであるにしても、これが『経済学批判』本文ないし『資本論』への適用されたばあいのことを、念頭において作製されたものである。このばあい、この図式だけで見れば、分業、貨幣、商品、交換価値、財 \parallel 生産物、労働、欲望、等々の、近代の諸経済学において、下向的に分析された抽象的諸概念のうちから、マルクスが、上向的思惟の端緒の規定を規準として、商品を出発点として撰択し決定した、ということになつてゐる。だが、マルクス自身においては、果してそのようなものであつたであろうか。そうではなくて、下向の極点としての商品が、上向のための端緒としての規定性をもつてゐるということは、下向の出発点においても、その過程においても、すでに予め解つていたといふのでなければ、下向が上向を目的として前提してゐる、ということがいえないのでなからうか。次に今一つの問題として、下向の出発点と上向の到着点とは、同一の現実の具体的実在であつて、ただ、その表象と概念との差異をそこに見るわけであるが、『経済学批判』の「序説」においては、この実在面について、ただ単に「表象の概念への加工」ということが主張されているだけのことである。認識なるものがヘーゲルにおいても「表象の概念への解放」であるといわれているのにたいして、マルクスにおいては「表象の概念への加工」であると言ひ直されて見ると見るべきであるが、この「加工」という認識作用の実体としての人間の思惟の運動の構造を、図式化したものが、まさに、この図式Bである。したがつて、ただ、それだけのものとしては、下向と上向との相互媒介的な意味は、抽象化された概念面においてと同じく、この具体的な実在面においても、分析されてゐることにはならない。したがつて同時にま

た、そこから現実に出発する下向的分析も、ただ偶然的な端緒としての「現実的な出発点」をもつだけであって、この出発点が端緒であるための論理的契機としての必然性を、そこに自覚したものではありえない。かくては、この図式によっては、下向と上向との相互媒介的関連によって成立する有機的全体としての、方法論の体系性もまた、表示しえないところだと考えねばならないであろう。では、このマルクスの方法の体系を完全に表示するためには、如何なる図式に描き改めらるべきであろうか。そのためにも、ここに指摘されたところの、残された問題——實在面における端緒の問題——に本稿の論述は進められねばならぬ。